

なぜカインの献げ物が神さまに受け入れられなかったのか、その理由を聖書は説明していません。これは謎なのです。この時、「カインは激しく怒って顔を伏せた」、と記されています。自分の献げ物が神さまに受け入れられない、という謎に直面する時、神さまに受け入れられている人への嫉妬となり、殺意が生まれていったのではないのでしょうか。神さまは顔を伏せたカインに向かって、「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。」と言われます。カインは精一杯献げ物をしたのです。だから神さまに向かって顔を上げてよいのです。神さまは、人生の謎に直面して苦しんでいるカインに、あなたの苦しみ、怒りを私に向けてぶつけなさいと言われるのです。神さまの前から離れないで、理不尽な現実の中で神さまに訴え続けていく。それが神さまが私たちに求めていることであると記すのです。

7 節に、「お前はそれを支配せねばならない」と記されています。新共同訳の文脈では、「それ」は罪のことで、罪を支配して犯さないようにせよ、との意味です。しかし文法的には、「それ」は彼、アベルです。ここで神さまはカインに、「お前は弟アベルを支配せねばならない」と、弟に対して、兄としての正しいあるべき関係を持つことを求めているのです。しかし、カインは顔を上げようとせず神さまの語りかけを無視して、弟を殺してしまうのです。ここでも、神さまはカインを問い詰めるのではなく、カインが自ら罪を告白するようにと、「お前の弟アベルは、どこにいるのか」と問いかけます。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」というカインの言葉は、兄としての弟に対する守り手という正しい関係を拒否していることを表しています。

その後、カインは事の重大さに驚愕し、神さまに懇願します。「私の罪は重すぎて負いきれません」。カインは自分が行ったことの結果、自分に襲いかかってくるものに思いを凝らし、恐怖のあまり悲鳴を上げ、血の復讐を恐れるのです。その時、神さまはカインの生命の保護を約束し、実行されます。神さまから顔を背けて殺人の罪を犯したカインが、神さまに捨てられ、滅ぼされるのではなく、なお神さまの守りの中に置かれている、とこの物語は語っています。

カインとアベルの物語は、私たちに、人生の謎、理由のわからない、説明のできない苦しみの問題を問いかけています。神さまが私たちに求めておられるのは、人生の謎に直面し、納得のできない苦しみに遭い、神さまが自分を受け入れて下さらないように感じる、まさにその時に、顔を伏せず、神さまを見上げることなのです。そして神さまに、自分の思い、苦しみ、悲しみ、怒り、納得のできない思いを投げかけていくことなのです。